

3年2組

 ミロ家族といっしょ
 ～山羊を見つめる中で出会う もう一人のわたし～


「普通は奇跡」

「大きい」、「さわってみると硬い」、「ちょっと動いた気がする」ミロのお腹を触る子どもたちの声です。横に広がるようにぷっくりしてきたミロのお腹。そして、大きく張ってきたおっぱい。予定日を5月11日に控え、子どもたちの期待も膨らんでいきます。しかし、期待は、膨らむものの、具体的にお産に向けて何をしたらいいのか、どんなことに気をつければいいのか、インターネットで探ってもなかなか詳しいことはわからずにいました。そんな中、定期的にミロの様子を見ていただいていた獣医のS先生が、子どもたちに話をしていただけることになり、2時間の特別授業が開かれました。

- ・ S先生は、みんなの質問に全部答えていた。やっぱりS先生はよく知っているな。自分もS先生みたいになりたいな (Mさん)
- ・ S先生って物知りなんだな、すごいんだなって思いました。赤ちゃんが生まれてくるのが楽しみになってきました。これからもミロの世話をがんばっていきたいです。赤ちゃんの世話もがんばりたいです。(Kさん)
- ・ 生まれたら乾いたタオルでふくことを知った。毛玉でうまれた山羊がいたことを知ってびっくりした。正常な生まれ方も知った。僕は一番正常に生まれてくるといいなと思った。(Mさん)
- ・ ミロのことをいろいろ考えました。赤ちゃんの生まれ方、準備することなどを教えてくれました。小屋に藁を敷く、生まれて2週間は抱っこしないなどいろいろ教えてくれました。ミロが角をやっていたことにびっくりしました。ミロは角のない山羊だと思っていました。とてもびっくりしました。(Nさん)
- ・ 赤ちゃんが生まれるのがとっても楽しみです。だけどその前にわらを切ったりしなければなりません。なので私はこれからの総合の時間を楽しみたいと思いました。(Sさん)
- ・ 産んでほしいけど怖い。(Hさん)
- ・ 赤ちゃんが生まれる前にミロが死んじゃったらどうしよう。(Kさん)
- ・ S先生が赤ちゃんが生まれることはあたりまえではない、奇跡だと言われてびっくりした。はじめはあたりまえだと思っていましたが全然あっていなかったです。けれども赤ちゃんが生まれることは奇跡だからうれしいんだなあって思いました。(Oさん)
- ・ 普通は、奇跡で考えてみたら、人間も普通はなかなかないなと思った。(Iさん)
- ・ S先生が教えてくれたから教えてくれたことをして幸せになってほしい。(Sさん)

上記は、子どもたちのふりかえりです。MさんやKさんが言う通り、S先生はなんでも知っていて、子どもたちのたくさんの質問に真剣に答えてくださいました。その中では、MさんやNさんが言うように、具体的な準備の方法や赤ちゃんがどのように生まれてくるかということ、そして注意すべき点が話されました。具体的な指示や明確な答えは、Sさんが「生まれてくるのが楽しみ」と感じるほど私たちに見通しを持たせてくれました。一方で、HさんやKさんが「怖い」、「死んじゃったらどうしよう」と感じさせるほど危険をはらんでいることも知らせてくれました。S先生の言葉で、印象的だったのは、「奇跡」という言葉です。「普通に生まれてくることは、奇跡なんです」。その言葉に、Oさんは自分の考えは「全然あっていなかっ



です。「普通に生まれてくることは、奇跡なんです」。その言葉に、Oさんは自分の考えは「全然あっていなかっ

た」と振り返っています。交尾から始まった150日という長い道のりは、母のがんばり、そして赤ちゃんの生命力、どちらも大切なものだけれども、それを支える周りの協力も重要な役割を果たします。だから一見普通に見える出産も、世界にたった1度きりのかけがえのないもの。だから「奇跡」。Iさんはこの「普通は奇跡」を、私たち人間に置き換えて「人間も普通はなかなかないなあ」と考えていました。予定日まであと20日となりました。Sさんの言う通り、ミロと赤ちゃんの幸せのためにS先生に教わったことをこれからの暮らしに活かしていきたいと思います。

「ミロ産んでくれてありがとう。赤ちゃん、生まれてありがとう」

5月12日にミロが2頭の子どもを出産しました。その時の様子をKさんのノートから紹介します。

4時間目の始まる時に、6年生が来て「ミロちゃんが大変だよ」と教えてくれた。有賀先生の代わりに先生が「算数をやってから行きましょう」と言った。そしたらまた6年生が来たので代わりに先生が「どうする？行ってみる？」とみんなに聞いた。みんなでミロの小屋に行くことにした。

ミロの小屋に行くと、ミロのお尻から赤っぽい袋が半分出ている。ミロは立ったり座ったりして赤ちゃんがまた中に引っ込んでしまった。しばらくすると、ミロのお尻から赤ちゃんの口と前足が見えた。ミロが立ち上がり、一歩歩いたところで、赤ちゃんが出てきた。高い位置だったので塩澤先生が慌てて赤ちゃんをキャッチした。塩澤先生は赤ちゃんを藁の上に置いた。するとミロが赤ちゃんに近づいて赤ちゃんを舐めた。

給食の時間だったので、一旦教室に戻った。3年1組さんが給食の準備をしてくれていた。ズームでミロの様子を見ながら急いで給食を食べた。その間に赤ちゃんが立ち上がった。給食を食べ終えて急いでミロの小屋へ行った。

10分ぐらいたったところでミロが座り、お尻から黄色い袋がすんわり出てきた。袋の赤ちゃんは自分の力で袋を破いて出てきた。ミロが赤ちゃんを舐めた。しばらくして有賀先生がやってきた。

この日、私用があり、私は出産に立ち会うことができませんでした。なんとか駆けつけたのは、出産が終わって約30分後のことでした。職員駐車場に車を止めるとたくさんの子が集まり、しがみつきながらその時のことを話してくれました。「先生、すごい可愛い」、「2人とも女だよ」、「ミロ死んでないよ」、「みんなご飯残しちゃった」、「無事にお産が進んだ!」、「袋のまま生まれたんだけど、破れた。塩澤獣医さんがやってくれたよ」、「すごいミロ、優しかった」、「すごい感動した」、「赤ちゃんがミロの近くで立ったり、お乳吸ったりしていて、ミロがお母さんになったんだなって思った。」次々にかけられるたくさんの言葉。その一つ一つから、出産の様子や子どもたちの奮闘ぶりが伝わりました。泣きじゃくる子どもたくさんいて、心配や不安をたくさん抱えながらの出産であったこともわかりました。子どもたちのたくさんの思いが伝わり、私自身も気づけば涙が溢れていました。



- ・2頭目の赤ちゃんは普通には生まれてこなかった。袋のままだった。その時、みんな心配だった「死んじゃうんじゃないかなって」。(Tさん)
- ・今まで色々ミロと私たちががんばってきたからその甲斐があったし、ミロは生まれる時に赤ちゃんが出たり引っ込んだりして大変だったから、1頭目が生まれた時、感動して涙が溢れました。赤ちゃんをペロペロして綺麗にする姿は、一瞬でお母さんになったような感じてした。(Hさん)
- ・みんなミロを飼っていないのに「がんばれ」って言ってくれたからうれしかった。ミロ産んでくれてありがとう。赤ちゃん、生まれてありがとう。(Iさん)
- ・2頭目が生まれる時、袋の中にいて「息できないよね。死んじゃう」とドキドキして泣きそうになった。子ヤギが生まれて、何回も何回も転びそうになったり、ミロに踏まれそうになったりして、やっと立った姿に感動

した。自分が小さい時、立ちたかったけど立てなかったと考えたら、ぼくも子ヤギと同じくらいがんばっていたのかなと思った。(Rさん)

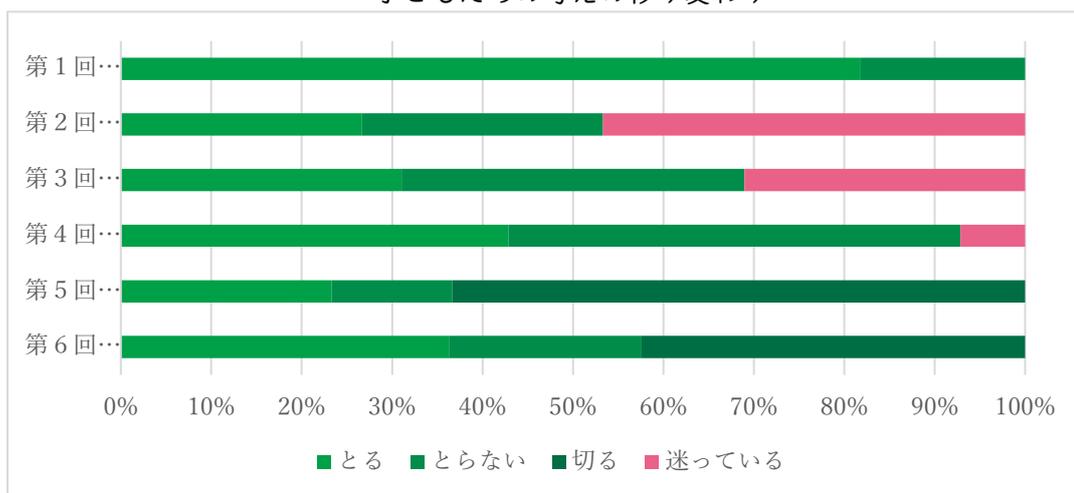
- ・ミロが苦しくて、みんなが「がんばれー」って応援してミロと赤ちゃんががんばって生まれてきた。ミロと赤ちゃんががんばってすごかった (Iさん)
- ・ミロ、がんばったね。まだ大変なことはいっぱいあるよ。負けずにがんばってね。赤ちゃんも元気に大きくなるんだよ。(Mさん)

子どもたちが記したノートや出産時の映像を見返す中で感じたのは、S獣医さんの「普通に生まれることは奇跡なんです」という言葉でした。痛みに耐えるように「メェ～、メェ～」と大きな声でなくミロ。袋を自らの力で破る赤ちゃん。その様子を祈るように見つめる子。泣きじゃくる子。多くの頑張り支えの中で生まれた命。無事に生まれてくることができた命ですが、これは当たり前のことではなく、奇跡なのだ、S先生の言葉が私の中にスッと入ってきました。子どもたちもそのことを身体で感じたに違いありません。

「ミロの栄養分を捨てるって意味になる」

2頭の子ヤギが生まれて2週間、お姉ちゃんの頭に何やら渦のようなものがあることに気がついた子どもたち。本で調べてみるとこの渦は角の生え始めであることがわかりました。いつもお世話になっている獣医のS先生に連絡すると、「角を取るなら、高さ1cmまで。角の直径が1cm～1.5cmまで」とのこと。幼いうちにしか取ることができないことがわかりました。「角をどうするのか」という大きな問いが私たちの目の前に立ちました。下記グラフは、話し合うたびに記していったそれぞれの意見を集計していったものです。

子どもたちの考えの移り変わり



最初の話し合いで多かったのは「とる」という考えでした。それは、「自分たちが(頭突きで)怪我をするし、妹やミロだって怪我しちゃうかもしれない」というものが大半を占めました。しかし、その「とる」という意見は、第2回目以降減ります。それは、角をとるには「電気ゴテ」を使うことを知り、その実際の姿を動画で確認したことが影響しています。「動画を見て、メェメェないでいてすごく痛そうで見てもいられなかった」とRさんは記しています。とることへの姉の痛みを痛烈に感じたのです。その後、「とる」か「とらないか」の話し合いは平行線を辿りました。その話し合いに、変化をもたらしたのは、S先生の話からでした。「切る」という選択肢を示していただいたのです。切る派のKさんは、S先生の話から「とるのは子ヤギにとって負担がかかる。でも取らないと私たちが危ない。角はあってもいいのではないかな。だから刺さらないように先だけ切りたい」としました。私は、この「切る」の登場で、話し合いは落ち着くのではないかと考えていました。しかし、そうはなりません。劣勢であった「とる」、「とらない」のそれぞれに強い思いがあったからです。

「とる」を一貫して主張していたOさんはこう語っています。「切ったって、角は残る。とらないということと少し同じじゃないかと思った。私はみんなにけがをしてほしくないです。とらないことにしたってそうじもできなくなるんじゃないか。先生しかそうじできる人がいなくなっちゃう」。ここには、一見「切る」がいいと思

えた私たちへの問いかけが「とらないということと少し同じじゃないか」という言葉で込められています。確かに、先が尖ってはいないだろうけれど、頭突きをされたら硬い角の根本の部分があたることに変わりはありません。そして、「みんなのけが」をととても心配しています。また、Oさんらしいのは、「そうじ」を気にしていることです。Oさんは、毎日そうじをしています。だからこそ、角を怖がってみんな小屋に入れずにそうじが滞ることを心配しているのです。

一方でKさんは、一貫した「とらない」派です。「(とらないことは、) 姉のためだし、あと角とミロのためでもあるかもしれない。だって角が生えているということは、角だって生きてるって意味。それにミロのためなのは、ミロががんばって自分の栄養分でお乳を作って、それで角が生えてきている。ということはミロのお乳できているからそれをとるってことはミロの栄養分を捨てるって意味になるからミロのためでもある」。「ミロの栄養分を捨てるって意味になる」という言葉は、“角＝危険なもの”として見ていた多くの子どもたちに新たな視点を与えました。でもそれは、全く新しいわけではなく、子どもたちのうちに密かに根付いていたもののようにも思います。大好きなミロの子どもであるということ、そして、私たちが苦労して集めたり与えたりした餌が栄養の源であることは、子どもたちの実感として存在していたものだからです。Kさんは、そのことに気づかせてくれたのです。

話し合いは、除角のリミットもあり、そろそろ終わりにしなければなりません。ですが、この「角をどうするか」という問いに答えを見出すことは難しいことです。私は、最後に必要なのは「覚悟」なのかなと考えています。どんな決断をしてもその決断に責任を持つという覚悟です。姉、妹、ミロ、そして私たちのことへ想いを巡らせ、友だちの意見からたくさんの影響を受けています。覚悟を持ってその時を迎えようと思います。



「とらないにならなかった時の悲しさより、 お姉ちゃんの将来が決まった嬉しさの方が何億倍も多い」

とうとう「とる」か「とらない」か、「切る」かが決まりました。結果は切るです。多数決で決めました。普通の多数決ではなく、いっぱい話し合っただけで「もう決まらなそう」ってみんなが言い始めたので「多数決にしよう」と誰かが言いました。でもみんなは、反対して「ちゃんと話し合いで考えたい」と言ったので、先生は考えました。「じゃあ、1回やって少なかったものを消してもう1回やって多かった方にすれば」と言いました。そしたらみんな賛成しました。それで多数決で決めました。そして、切るになったのです。

私の今の気持ちは安心しました。なぜかという話し合いも終わってちゃんとした意見にまとまったからです。切るだと頭突きは痛いかもしれないけれど、お姉ちゃんへの痛みも少ないし、ホースなどをつければ角の先端が柔らかくなるのでいいと思います。これからも覚悟を持って過ごしていきたいです。

Aさんが綴った角の話し合いの終末場面です。2組で決断した答えは「切る」でした。この答えにAさんは「安心しました。ちゃんと意見にまとまったからです」としています。「とる」派だったMさんも「切るって決まったけど、いいと思う。悔しいと思ったけど、やったって気持ちもある」としています。たくさん話し合いました。その中でたくさんの意見が交流されていきました。そうしてたどり着いた決断だからこそMさんのような納得が生まれていったのだと思います。

(自分の) とらない派は先になくなっちゃって少しだけ悲しかったけれど赤ちゃんの生き方が決まってよかった。「切る」は「とる」より自然に近いし、「お姉ちゃんよかったね」と思った。とらないにならなかった時の悲しさより、お姉ちゃんの将来が決まった嬉しさの方が何億倍も多い。切ると決まったからその角で精一杯楽しく生きて欲しいなと思った。姉ちゃん頑張ってたねと思った。お姉ちゃんの将来が一つ決まったから頑張ってたって育てたいなと思った。

3年2組で決めたから、掃除をしなかったりするのをやらないで、切る時の痛さもしっかり受け止めて、同じ

気持ちになってちゃんと慰めてあげたい。お世話もしっかりして、直接入ってあげたい。角があるから何かをしないということは絶対やめたい。痛かったり悲しかったりしたら同じ気持ちになって慰める。自分たち3年2組で決めたからそれに関係することなどはちゃんとやって掃除などをしないことは絶対にやめたい。

同じようにRさんは、お姉ちゃんの将来が決まったことの嬉しさを感じていました。それは、自分の「とらない」という考えにならなかった悲しさの何億倍もの大きさだったようです。そして、Rさんは、「角があるから何かをしないということは絶対やめたい」という飼育への覚悟と、「痛かったり悲しかったりしたら同じ気持ちになって慰める」とお姉ちゃんと共に在りたいという気持ちを抱いています。

私自身もこの「切る」ということが、果たして最良の答えであったのかどうかはわかりません。それでも、お姉ちゃんの角を巡って様々な友の思いに触れたこと、専門家の話からお姉ちゃんの痛みを想像していったこと、答えを一つにするために折り合いをつけていったこと、出した結論に責任を持つようとしていることは、大きな学びになったと強く感じています。

学校で動物を飼育すること

動物飼育を始めて1年が過ぎました。ミロを散歩させながら、ふと動物飼育の意味について考えている自分に気がつきました。今の所の結論は、「もう一人の自分に出会うことができる」というものです。

「もう一人の自分」それは、いくつかあるのですが、一つは、自分の中に生まれるもう一人の自分です。例えば、赤ちゃんの角をどうすればよいかの話し合いでは、「とる」と「とらない」で議論が進みました。どちらかの



立場になって議論はしていましたが、多くの子がどっちにすればよいか迷っていました。話し合いの機会をとるたびに意見を変えていた子もいます。それぞれの中にみんなのことを考えたら「とる」方がいいと感じる自分と、赤ちゃんのことを考えたら「とらない」方がいいと感じる自分がいたのです。Rさんは、話し合いの後、「とらないにならなかった時の悲しさより、お姉ちゃんの将来が決まった嬉しさの方が何億倍も多い」としています。両方の自分がいるからこそ納得できる部分があるのです。動物飼育をするとそのような場面がいくつも起こります。自分の中にたくさんの迷いが生じ、様々な「もう一人の自分」に出会っていくのです。

もう一つは、動物の中に「もう一人の自分」を見るということですが、なんだか難しい話ですが、例えば、出産の際に多くの子が涙を流していました。自分ごとのようにその痛みを感じ、新しい命の誕生の喜びに涙を流しました。一緒に暮らしてきたから、そして、出産についての学習をしてきたからミロの感情に迫ることができたのではないかと思います。そこにはあたかも「山羊になっている自分」が存在しているかのように思えたのではないのでしょうか。

最後に感じているのは、友達の中に「もう一人の自分」を見るということです。飼育を始めてまもない頃、掃除をする人が少ないことを気にしている私にHさんとKさんが、次のように話してくれています。「いいんだよ。だって色々な思いがあるんだよ。ミロともっと仲良くなりたいたいから散歩しているんだよ」、「あと、ご飯作っている人は、おいしく食べてほしいって、私たちは掃除して綺麗にしたいって、ほらみんな思いがあるんだよ」、「掃除やってとかじゃなくて、みんなもやりたいことがあるからやらせてあげなよ」。ここには、行動は違うのだけれど、ミロへの思いは変わらないのだという2人の心情が現れています。私の感じていない友の思いを2人が代弁してくれているのです。これこそ友の中に「もう一人の自分」を見る姿なのではないかと思います。

人は成長していきます。背も伸びますし、体重も増えます。ですが、動物飼育では特に数字の上で増えることはありません。内田(2019)は、「成長するとは複雑になること」としています。動物飼育では、きっと様々な自分に出会うことで「自分は複雑な人間なのだ」と感じているのではないかと思います。子どもの複雑な姿をこれからもお伝えできればと思っています。